

旧吉城郡宮川村の埋蔵文化財調査と飛騨みやがわ考古民俗館

林 直樹（岐阜県立関高等学校）

はじめに

1990年代、当時の吉城郡宮川村では、国道360号線バイパス工事に伴う緊急調査として、宮ノ前・堂ノ前・家ノ下の3遺跡、さらに村の観光開発に伴う緊急調査として、塩屋金清神社・杉原瑞穂遺跡の2遺跡、計5遺跡の調査が行われ、結果的に「発掘ラッシュ」とでも呼ぶべき事態を迎えた。

いずれも縄文時代を主体とする時代の遺跡であり、発掘調査の成果がメディアでも次々と取り上げられ話題となった。一方で、膨大な埋蔵文化財をいかにして保管し、活用すべきかについて、役場内部で真摯な議論が続けられ、結果、飛騨みやがわ考古民俗館が建設されるにいたった。本稿では、その歩みの一端を紹介したい。

1 緊急調査の開始と経緯

富山と飛騨を結ぶバイパスの全線開通を急ぐ村は、工事に伴う埋蔵文化財の緊急調査にも積極的であった。1989年夏には、南山大学による宮ノ前遺跡の試掘調査が行われ、90年度以降は、著者が、県からの派遣職員として村役場に籍を移し業務にあたることとなった。

当初は2年の予定であったが、発掘区の拡大等の諸事情により、派遣期間は都合7年に及んだ。その間、著者が調査に関わった4遺跡の概要は以下の通りである。

<宮ノ前遺跡> 西忍地区に所在する。村内では比較的広闊な河岸段丘上に形成された遺跡である。水成堆積層中に旧石器時代から縄文早期にかけての文化層が検出されたことや、植物・昆虫遺存体や木製遺物が出土したこと、跡津川断層の活動痕跡が認められたことなど、話題性に富んだ遺跡でもあった。上層からは、前期・中期・後期の遺構も検出されており、長期にわたって利用された遺跡であったことが判明している。

<堂ノ前遺跡> 野首地区に所在する。跡津川断層が河川と段丘を斜行しており、遺跡内の堆積土にも、地震活動による洪水堆積の形跡がみられる。下層からは、縄文早期・前期の文化層が、上層からは主に縄文中期中葉の集落跡が検出されている。中期土器には、北陸・信州双方の影響がみられるが、前者の影響がより濃厚である。

<家ノ下遺跡> 林地区に所在する。河川本流に面した低位段丘上に位置し、浅い堆積土中から、住居跡や配石、土坑等の遺構が検出されている。土器年代は、おおむね縄文後期中葉から晩期中葉を示す。土器には北陸の強い祭祀に供されたと考えられる御物石器や石冠、石刀が多数出土している。当該時期の精神文化をうかがう上で興味深い資料といえる。

<塩屋金清神社遺跡> 塩屋地区に所在する。早くも明治年間から、石棒が多数出土する遺跡として知られていた。南山大学の試掘（1973）の際、縄文後期土器とともに、原石や未製品が出土したことから、石棒製作址の可能性が示唆されていた。1993年度より本格的な調

査が開始され、千点を超す石棒（破片を含む）や大量の製作道具類（たたき石・砥石）が、縄文後期前葉の土器とともに検出された結果、石棒製作址であることが明らかにされた。

2 飛騨みやがわ考古民俗館の建設

膨大な出土遺物の保管や貴重な調査成果の活用をどうするか。対応に迫られる中、当時の道下則明村長から、出土文化財管理センター（文化庁管轄）の補助申請を行うよう指示を受けた。県文化課を通じ、文化庁に問い合わせたところ、保管庫以外に展示スペースとしての活用も認められるとのことであったので、保管・展示の双方を兼ねた「収蔵展示」の方法を取り入れるなどの工夫を交え、博物館建設の構想を練ることとなった（ガラスケースの収蔵展示はのちに地震の被害の原因となったが、阪神淡路以前であり、この時には想像すらつかなかった）。

出土文化財管理センターをどこに建設するべきか。国指定重要民俗文化財の公開施設として知名度を挙げつつあった郷土文化伝習館付近か。あるいは、温泉やまんが図書館で注目を浴びていた「飛騨まんが王国」の敷地内か。より多くの見学者を集めるのであれば後者であるが、既存文化施設との一体管理、コンビネーションを考慮して、前者と併設した博物館施設としての整備を推進することとし、名称も「飛騨みやがわ考古民俗館」とした。

博物館構想が持ち上がった当初は、石棒に特化した展示内容を検討していたが、宮ノ前遺跡下層包含層が検出されるに及んで、旧石器時代末から縄文全時代を概観する展示や、宮川の縄文文化を特徴づける展示に切り替えた。

時代こそ違え、近現代の民俗資料、先史の考古資料の展示からは、豊かな自然に支えられた先人の、たくましくしたたかな生活ぶりを感じ取ることができると思う。

おわりに ～今後の展望～

1996 年度をもって宮川村勤務は終了し、著者は高校の教育現場へと復帰した。その後も、報告書・啓発書の刊行、考古・民俗の調査、岐阜県史編纂事業等、断続的ではあるが、考古民俗館と関わりをもち現在にいたっている。飛騨市誕生（2004）以後は、学芸員の三好清超氏が、八面六臂の活躍ぶりで考古民俗館の価値を高め、全国規模で注目を集める施設となっている。関係者のひとりとして、嬉しく誇らしく思う次第である。

2018 年以降、著者は、郷土の歴史や文化を探究する地域研究部の顧問となり現在にいたっている。この間、部員とともに、幾度か考古民俗館や収蔵庫を訪れた。宮川流域の豊かな自然や膨大な文化財、今も伝統的な暮らしを守る方々と触れ合った生徒たちは、イメージ豊かに、学びを深めることができた。

現在、考古民俗館では、小学生が案内役を務めるイベントが行われていると聞く。好ましい企画であると思う。子どもや若者の学びの場としての整備を期待したい。現在、本校地域研究部の部員は、前近代の越中西街道に強い関心を寄せている。近いうちに、著者も部員とともに、古い街道の痕跡を訪ねたいと思う。